

【一般演題1】 第6席 「甲乙・外台・類成・医心方における穴位主治条文の字列構成の相互関係」
愛媛 光藤 英彦

医心方は10世紀に丹波康頼によって日本で成立した医書である。隋唐文化の日本への伝来が一段落した時期に成立し、中国では亡佚した初唐及びそれ以前の医書の内容が多く引用されていることに意義があるとされている。穴位主治に関する記述も、その鍼灸篇中に見られるが、体系的な条文、即ち複合条文からの抜粋であることが伺われる。既に小曾戸（丈）は「医心方の穴位主治条文は、楊上善の類成からの抜粋である」と述べている。小曾戸（丈）や黄龍祥は医心方の文献的重要性を指摘し、医心方を甲乙や外台の条文の字句の校勘に用いている。しかし私共は字句よりも、その字句を選択した丹波康頼の抜粋態度の方に注目する。

私共は、穴位主治条文の字列構成を分析するという手法を用いて、甲乙・外台・類成と医心方との相互関係を調査した。その結果、

- ①医心方は類成の骨格が抜粋されたものであることがわかった。
- ②外台は、黄帝明堂經3巻の字順と内容を伝承して成立したに違いないと考えられた。

又、医心方の特性及び丹波康頼の見識に基づいて、類成及び黄帝明堂經3巻の共通の起源である単位条文群の復元とその群間序列の復元を試みたところ、一定の成果のあがることが示された。